

建中寺徳川家御霊屋について

○ 独自の形式と豊かな装飾を持つ尾張徳川家の格式高い霊廟

けんちゅうじとくがわけ くれいや
建中寺徳川家御霊屋 3棟

ほんでん あいのま きょうでん からもん すきべい
本殿・合間・経殿、唐門、透塀

所在地：名古屋市

所有者：宗教法人建中寺

指定基準：意匠的に優秀なもの、歴史的価値の高いもの

【概要】

旧名古屋城下の東端に境内を構える尾張徳川家の菩提寺。藩祖義直^{げんけいこう}（源敬公）の菩提を弔うため開創され、源敬公は当初、本堂に祀られた。以降、境内には歴代の藩主と夫人の御霊屋が造営された。当建物は本堂に代わり新たに設けられた源敬公の御霊屋で、寛政10年（1798）の建築。明治以降は建中寺に残る唯一の御霊屋となり、尾張徳川家代々の祖霊を合祀している。社殿は本殿と合間、経殿からなり、正面に唐門¹を配し、透塀が周囲を取り囲んでいる。内外の絢爛な極彩色は保存状態が良く、意匠性に富む。入母屋造²妻入³で内部を上下段に分けた本殿、吹放しの合間、読経を行う経殿を複合した社殿とそれらを囲う唐門と透塀⁴からなる構成は、建中寺特有の御霊屋の形式を堅持しており、歴史的に重要である。

唐門¹: 唐破風造^{からほふ}（合掌部が丸く沿った山形をなす曲線状の破風）の門

入母屋造²: 母屋を切妻造^{きりつま}（本をなかばひらいて伏せた形の屋根）とし、その四方に庇をふきおろして一つの屋根としたもの

妻入³: 屋根の側面（妻）を正面として、そこから建物に入る構造のこと

透塀⁴: 内部が透けて見える塀のこと



建中寺徳川家御霊屋（名古屋市教育委員会提供）